

〔翻 訳〕

## 『スペクテイター』(60)

—第570号から第579号—

門 田 俊 夫

第570号 1714年7月21日(水曜日)

【バジエル】

騒々しい些細なこと。(ホラティウス)<sup>1)</sup>

人はほぼ誰もが野心に駆り立てられます。この法則が誠実で才能豊かな人に振り向けられますと、社会にとって無限の貢献をすることになります。それに反して、その資格がないのに、自分が目立つことだけを考えますと、その人は大きな害をまき散らすか、非常に滑稽な人物になるかのどちらかになります。ここでは微々たる野心に限定したいと思いません。そうすることで、中途半端な手柄や些細な実績で著名になる人たちがいます。いかに多くの人々が地口とか駄洒落で評判を呼んでいることでしょうか。皆さんはしばしば大道芸人が直したまま顎や額に長い棒を載せて周りに人々を引き寄せているのを見掛けるかも知れません。足で文字を書いたり、手で歩いたりしようとする野心を抱く人もいます<sup>2)</sup>。とんぼ返りをして評判を呼ぶ人もいますし、輪くぐりで名声を博す人もいます。「その例は枚挙に暇がない。話すとき怒鳴っているファビウスをさえうんざりさせるだろう」<sup>3)</sup>。最近遭遇した予期せぬ出来事によって、私はこういった思いに駆られています。

私は先日、ある宿屋にいましたが、私たちの希望のものすべてを主人が調達してくれました。偶々、私はその主人と話を始めたのです<sup>4)</sup>。そして、名前は伏せて置きますが、ある偉大な人物の話になったとき、自分は光栄にも時々この方に口笛で遇したのです、と彼は言いました。(ちなみに)皆さん、言って置きますが、私はヨーロッパのどんな立派な人にでも口笛で合図をするのです、と語るのです。これは当然彼が私たちに技の実例を披露したがっているのだと思いました。すると、彼はテーブルナイフを手にして、ナイフの刃先を口に当てて、それを楽器にし、イタリアの独奏曲を演奏しました。そして、ナイフを置くと、つぎはま新しいパイプを2本手にしました。そして、吸い口の方をテーブル上で旋律的な顫音を立てて滑らせたあと、そこからメロディを拾い、同時に、合奏の形で

1) ホラティウス『詩の技法』322

2) 第220号参照。

3) ホラティウス『諷刺』1.1.13-14

4) ニコルスによると、この人物はデイントリーとのこと。

口笛を吹いたのです。要するに、喫煙パイプはわが名手の手にかかるると音楽を奏でるパイプとなったのです。この楽器をそれなりに使用できるようにするには、パイプを数多く台無しにしてしまい、自分も壊れてしまうのではといった状態にまでなったのです、と彼は率直に打ち明けてくれました。そこで私は、彼の創意を励ますために、来週一緒に食事をするために友だちを連れて来ると言いました。すると、彼は感謝してその日に備えて新たにフライパンを用意しておくと言いました。ご心配に及びませんよ、当座はトーストとオイルで間に合います、と私は返事をしました。彼は私の率直な言葉を聞いて微笑み、フライパンで曲を奏でる積りです、と言いました。私とその約束に驚いていると、彼は古いフライパンを持って来て、それをボードの上で擦りながら、それに合わせてとても調子よく口笛を吹きました。それはベースヴィオラとほとんど区別がつかないほどでした。彼はそれからテーブルにいる私たちの傍に腰を下ろし、私の友人が鼻歌を歌っているのを聞いて、大きな声で歌ってくればパイプで伴奏してあげるのですが、と言いました。私の友人は素敵な低音の持ち主ですので、フライパンに合わせて歌うことを選択しました。実際、二人はとても素敵な合奏となりました。主人がキッチン音楽にとっても熟達していることが分かりましたので、彼に火箸と鍵も自由自在なのですかと尋ねました。それはあまり評判がよくないので数年前に断念しましたが、もし私さえよければ、焼き網でやってあげます、と彼は言いました。音域を拡げるために、焼き網に格子を2本追加したのです、と彼は言いました。サッフォーはリュートに弦を2本追加できたことでしょうから、私は彼の創意にとっても満足しました。要するに、彼のキッチンの至る所に楽器が備え付けられていることが分かり、この芸人はある意味でバーレスクの音楽家なのだと見なさざるを得ませんでした。

その後、彼は勝手に様々な鳴鳥の鳴きまねを始めました。私は友人と一緒に、夜鳴き鶯の鳴き声に合わせてそれぞれの恋人のために乾杯をしました。そのとき、急にツグミの声が変わって驚きました。ツグミのつぎは、雲雀になり、適切な音階で上がっていき、ゆっくりと調子を外さずに下降してくるのです。そのつぎには、もっと小型の鳥の鳴き声に合わせて彼の口笛の音量が小さくなって行きました。彼は平均よりも大柄で背の高い人物ですので、目を開けて見ると巨人、目を閉じればトムティットだと思うに違いありません。この熟練者は以前テンプルバー近くの玩具屋の主人であったこと、そしてまた、名高いチャールズ・マザーが彼の元で育ったということを、読者の皆さんにお知らせして置かなくてはなりません<sup>5)</sup>。彼がこれまでに遭遇した不幸は、主として音楽に打ち込み過ぎたことだということです。そこで私としては、読者の皆さんに、彼は引き立ててあげるにふさわしく、ワイン1本で大きな気晴らしを与えてくれる人物だと推薦せざるを得ません。彼はコヴェントガーデンの小路近くにあるクイーンズアームズでワインを売っています<sup>6)</sup>。

5) 第328号参照。

6) クイーンズアームズはスペクテイター紙で何度か広告が出るが、コヴェントガーデンにはない。

第571号 1714年7月23日(金曜日)

【アディソン】

私たちは空の彼方に何を求めるのか。(ルカヌス)<sup>1)</sup>

私の取り組んでいる仕事はユーモアと学識だけでなく道徳と神に関する随筆も含んでいますので、以前のスペクテイター紙<sup>2)</sup>をベースにしたもので、ある友人が送ってくれたつぎの手紙を公表したいと思います。この手紙は、時々真剣な思いに身を委ねる悟性を見くびっている点が何一つないと考える読者に気に入って貰えることは間違いありません<sup>3)</sup>。

前略

今月金曜日9日の紙面において、貴殿は神の遍在について触れておられ、同時に、神はあらゆるものに立ち会っておられるので、神はあらゆるものに注意を払い、存在の在り方すべてに内々関与されているのだということを示しておられます。言い換えれば、神の全知全能と遍在は共存しているのであって、無限の全空間に満ちているわけです。このように考えますと、私たちは信心への気持ちや徳行への引き金となるかも知れません。しかし、この件については、何人かの優れた著者がすでに扱っていますので、私は他の人たちが触れていない観点から考えることにします。

第一に、創造主と行動を共にしているが、その存在から何一つ特別な恩恵や利点を受け取らない知的な人の状態はいかにわびしいかということ。

第二に、神の存在から神の怒りと憤り以外の影響を知覚しない知的な人の状態はいかに嘆かわしいかということ。

第三に、神の慈悲と慈愛という密かな影響から神の存在に気づく知的な人はいかに幸福であるかということ。

第一の点に関してはつぎのようになります。物質のごく小さな部分まですべて、そこを通り抜けている神によって動かされています。天と地、星や惑星もそこに内在するこの偉大な法則のお陰で移動し、かつ、引き寄せられています。自然界の無機物もすべて、創造主の存在によって鼓舞され、それぞれの長所を発揮することが可能となっているのです。理性のない創造物の本能も、同様に、神の力によってそれにふさわしい目的に向かって機能しています。この聖霊と協調せず、この存在に注意を払っていない人だけが、幸福を完全なものにするのに役立ちかつ必須の利点を何一つ受けないのです。その人と共に、その人の中に、また、その人の周囲のあらゆるところに神は存在しているのですが、その人には利点が何もありません。まるでこの世に神が存在していないかのように信仰心を持たない人にも同じことが言えます。実際に、いかなる創造物であっても、神がそこから立ち去

---

1) ルカヌス『ファルサリア』9.579

2) 第565号参照。

3) 本号の大半を占めているこの手紙は2つ折り紙で印刷された。第565号、580号、590号でも「無限」というこの主題が登場する。

ることはあり得ません。しかし、神は不完全であることが分かっている私たちからその存在を撤退させることが出来なくても、喜びや慰めをすべて取り上げることは可能です。おそらく私たちが存在していく支えとなるためには、神の存在が不可欠なのかも知れませんが、幸福とか不幸といったことに関しては、神は私たちの才覚に任せるのかも知れませんが、その意味では、神は私たちを存在から退け、聖霊から引き離すのかも知れません。すぐそこにあり、いつでもその用意の出来ている喜びを注入しようと心を開かせるには、このただ一つの慰めさえあれば、十分だと思うに違いありません。とりわけ、第二の点を考えればそうです。

私たちは自然の大いなる創造者が必ずしも常に創造物に冷淡な人ではないのだと確信できるかも知れませんが、神の愛を感じない人々は、最終的には必ず不機嫌になります。苦しむことで創造主に気づくだけの人ほど嘆かわしいものはありません。本質的には天国にいるのも地獄にいるのも同じことになりますが、そういった呪われた場所の住民は神の怒りだけを見ることになり、神から身を隠す炎の中で縮み上がるのです。想像力では怒る全能の神の恐ろしさは分かりません。

私としては、時と場所を問わず親密に結びついている神の不興を買っている知的な人の惨めさについて考えることにします。神は魂を不安にさせ、苦しませることが出来ます。神は人生の最大の楽しみが私たちを元気づけ、苦難を乗り越えさせるのを妨げることが出来ます。こうなってしまいますと、誰も神の存在、つまり、神の慰めから見捨てられているのだという思いに耐えることは出来ず、神の恐怖しか感じなくなります。忍耐の試練のために、嘆かわしい状態に置かれたときの、ヨブの諫めの言葉ほど痛ましいものはありません。「なにゆえ、わたしをあなたの的とし、わたしをあなたの重荷とされるのか」<sup>4)</sup>。第三に、神の慈悲と慈愛という密かな影響から神の存在に気づく知的な人はいかに幸福であるかということ。

天国にいる人々は神と相対します。つまり、私たちが目にする人物のように、神は自分たちの目の前にいるわけです。おそらく心に能力が備わっているのでしょう。私たちの五感が物体を感じ取るように、彼らはその能力によってお互いを感知するのです。魂が肉体から解き放たれる、つまり、魂が栄光を与えられた体に移されたとき、いかなる空間に住もうとも、魂がこの能力によって常に神の存在に気づきます。私たちと精神世界とを隔てる肉体のバールを持つ私たちは、神の霊が私たちと共にあるのだと自覚することで満足しなくてはなりません。神は私たちの心の中にそれを引き起こしてくださいます。私たちの外界の感覚はとても鈍いものですから、神を感知することは出来ません。しかしながら、神が私たちの精神に与える威光によって、神が私たちに覚醒させる徳高い思考によって、神が私たちの魂に伝える内なる慰めと安らぎによって、善良な人たちの思いの中に絶え間なく湧き起っているあの恍惚とした喜びと内なる満足感によって、神がいかに慈悲深いかを経験し理解することが出来ます。神はまさに私たちの存在そのものの中に宿っており、

---

4) 『ヨブ記』第7章第20節。

その理解に光を当て、その意思を矯正し、その情念を純化し、人のすべての能力に活気を添える魂の中の魂なのです。それゆえ、祈りと瞑想によって、美德と申し分のない仕事によって、神と自身の魂との意思疎通を図る知的な人は非常に幸福な存在と言えます。万物が眉を顰め、全自然が陰悪に見えても、彼を取り巻く嫌悪感の最中に、彼の心の中には心を鼓舞することが出来る神の光と支えが備わります。救い主がすぐ近くにおいて、常に自らを苦しめたり怖がらせたりするものよりも近くに控えていることが彼には分かっています。中傷や軽蔑にさらされても、彼は魂の中で善なることを囁いてくれる神の声に耳を傾けます。彼は神を擁護者、栄光、そして理知を高めてくれるものと考えます。この上ない孤独と隠遁の状態のときは、自分が神と共にいるのだと分かっています。そして、心の中で、神の存在を人々との交わりで得られる何ものにもまして喜ばしい気持ちになっていることに気づきます。死の間際でも、死の苦しみを魂と常に共にいて、いままさに最高の喜びを与えようと待ち構えている神の姿との間にある仕切りが取り除かれようとしているのだと考えます。

このようにして、私たちが幸福になり、慈悲と優しさの密かな喜びから創造主の存在を知るようになると、聖書で言う「わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」<sup>5)</sup> という思いに注意を払うに違いありません。私たちは聖霊を悲しませないで、神が私たちと共にいることを喜んでいただくために、私たちの瞑想を神に受け入れられるものにするために注意を払わなくてはなりません。神に対するこの観点はセネカにつぎの考えを導いています。彼は書簡の中で、「私たちの中には、善人悪人双方を監視し見守っており、私たちが神に遇するのと同じように私たちに遇する聖霊が宿っているのだ」<sup>6)</sup> という実に素晴らしい文章を残しています。さて、この話は「もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そしてわたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところへ行行って、その人と一緒に住むであろう」<sup>7)</sup> という神のお告げのとても力強い言葉で締め括ることにします。

草々

第572号 1714年7月26日(月曜日)

【ピアース】

医者だけが治癒すると言うだろう。(ホラティウス)<sup>1)</sup>

私の新聞が学識のある才人の皆さんが寄稿者になる励みになっていると分かり、これ以上嬉しいことはありません。昨日、偽医者に対するつぎの感想を受け取りましたので、それを読者の皆さんにお伝えしたいと思います。筆者のお許しを願いたいのですが、若干の

5) 『ヘブル人への手紙』第10章第38節。

6) セネカ『道徳的書簡集』41.2

7) 『ヨハネによる福音書』第14章第23節。

1) ホラティウス『書簡詩』2.1.115-16

加筆と削除をさせていただきました。

生命に対する願望は当然のかつ強い感情ですので、私は長い間医術の技量を疑わないこととして来ました。きちんと組織された国家はもともと医師を尊敬すべき立派な職業だと考えて来ました。ホメロスのマカーオンやウェルギリウスのイアーピュクスは名高く、戦争の英雄であり、少なくとも敵味方双方に大混乱を引き起こしました<sup>2)</sup>。偽医者 of 能力をほとんどあるいはまったく信用しない人たちは、健康を売ってかなりな利益を上げるのを厭わないためか、有能な医者では無理な場合は、溺死しかかった人物のように、患者が藁をもつかみ、この上なく無知な医者に救いを期待するためか、偽医者に打ち込むこととなります<sup>3)</sup>。こういった行商の医者には、レース飾りのついた帽子や愉快的なアンドリュート同様に、厚かましく多くの言葉を必要としますが、病人の心の中にペテン師の主張を支持する気持ちがないと、彼らはほとんど役に立ちません。一方に生命への愛着があり、他方に金銭への愛着があるとき、両者はうまく合致するわけです。

グレート・ブリテンのどの町にも、必ずこの手合いのペテン師が一人はいるものです。彼らはチャンスをつかみ、市のたつ日には格言や処方盛り込みながら、善良な人々に向かって熱弁をふるいます。間違いなく、そのペテン師はその町へやって来るのは個人的な関心からでなく、その町に対する特別な愛着からです。ハマスミスでこの公共心のある芸人の一人を見掛けたことがあります。彼は聴衆に向かって、「自分はこの地で生まれ育ちました、生誕の地には特別な思いがありますので、出来るだけ多くの人に5シリングのプレゼントをすることにしたのです」と言いました。聴衆は全員啞然とし、すぐに言葉通りに受け止めました。彼が細長い手提げに手を入れ、誰もがクラウン銀貨が出て来るものと期待していますと、ひとつかみの小さな包みを取り出しました。見物人たちに向かってこれはいつも5シリング6ペンスで売っていたのだが、この地の人々には特別に5シリングにしてあげると言いました。この医者がここにいる人の中には外国人はいなく、全員ハマスミスの人だとの裏付けを取った後、全員直ちにこの寛大な申し出に応じ、彼の薬はすべて売り切れたのでした<sup>4)</sup>。

この術の詐称者たちの中には、馬も塩漬けニシンも使わない別種の者が存在します。彼らは屋根裏部屋に身を置き、ちらしや広告で非凡な能力を伝えます<sup>5)</sup>。これらは、ヘロドトスが「この国には医者というものがいないので、病人は家に置かず広場に連れてゆく。通行人は自分がその病人と同じような病気を患ったことがあるか、または他人が患ったのを見たことがあるかすると、病人の傍へ行って病気について知恵を授ける」と語る東洋の風習に由来したと思われる<sup>6)</sup>。しかし、風習は崩壊するものなので、現代のこういった

2) マカーオンは医神アスクレピオスの息子で、トロイ戦争のときギリシア軍付の医師であった。

3) 偽医者については、第444号参照。

4) レストレインジ (1616-1704) にも同じような話がある。レストレインジは熱烈な王党派で、パンフレット作者。

5) 塩漬けニシンについては、第47号参照。

術者は処方薬を公表したりそれを試したりする前に、治療を証明するための人物を自分で用意します。偽証者の一人としてこういった術者の元でその任にあたり、病気に罹ったことがないのに、その施療院であらゆる病気が治癒したポーターについて耳にしたことがあります。こういった人々がその聡明さによって万能薬、丸薬、薬用ドロップを創り出すのです。そしてほかのすべての医者から見放される前に来られるとそれを侮辱だと考えます。彼らの薬は信頼出来、確実に効き目がある、つまり、医者を富ませ、うまく患者を安心させるのです。

最近、ウェストミンスターのあるコーヒーハウスに立ち寄りしました。その室内にはこの種の装飾品がぶら下がっていました。万能薬やチンキ剤や痛み止めの湿布布やイギリス丸薬や舐め薬などがありました。要するに、私が思いますに、病気の数より沢山の種類の医薬品があったのです。これだけ多くの発明品を見て、私は、自分が急襲に備えて武器を保管している兵器庫か弾薬庫のようなところにいるのだと思わざるを得ませんでした。万一、側面から攻撃されても、ここには肋膜炎を治療する信頼のできる防御用の甲冑がありました。万一、病気で司令部が奇襲を受けても、ここには貫通することのないヘルメット、つまり、術者の言葉を借りれば、「頭部用チンキ剤」<sup>7)</sup>を購入できます。万一、本隊が襲われても、ここには様々な攻撃に備えたありとあらゆる種類の甲冑があるわけです。私は人々が人生に対して幸福を望める現代に祝意を表し始めました。現代は、ある意味で死が打ち負かされ、苦痛は短時間で収束することになり、喜びの有難味を増すことになったのです。こんな思いに駆られていたとき、運悪くひと昔前の聡明な紳士の話の思い出しました。この紳士がひどい痛風に悩まされていたとき、ある人物がやって来て、ある方法を用いれば治癒します、間違いありません、と言ったのです。この口上を受けた召使がそれを主人に伝えました。主人は、その人物は徒歩でやって来たのか、それとも、軽馬車なのかと尋ねました。徒歩ですと知らされますと、「そんなならず者は追っ払ってくれ。そいつの方法が言っている通り確実なものであれば、今では6頭立て馬車に乗っていてもおかしくないはずだ」と主人は言います。この話と同じことで、もしこういった広告主たちが主張通りの技術を持っているのであれば、こんなにも長年にわたって連続して住所や薬の効用を言い触らす必要がなかったはずだ、と私は考えました。実際、痩せの有効な治療法を主張する人がいます<sup>8)</sup>。それを試した人にどんな効果があったのかは私には分かりませんが、それを求める声が数多くに達したので、医者自身の病気を治癒させるのに効き目があったのだという情報が確かな筋から私の元へ寄せられています。もしこういった医者たち一人一人がその薬の実効例をあげれば、彼らは近いうちに評価されることになるに違いありません。

ちらしの大半はひとつの言い回し、つまり、(神のご加護によって)自分たちは〇〇の

6) ヘロドトス『歴史』1.197

7) 頭部用チンキ剤は、長い間、ひきつけ、卒中、麻痺、頭痛、うつ、幼児の発作などなどに効くとされた。

8) さかんに広告された治療法。

治療をする、となっています<sup>9)</sup>。この表現は確かにとても適切で明快です。なぜなら、それですべてを言い表しているからです。彼らが関わる患者に治療を施すと、彼らはアイネイアスを治療したイアーピュクスと同じくらいの貢献を主張することが出来ます。イアーピュクスは医術を試した。根気強く傷を手当しました。それが英雄を救う唯一の手段だったのです。ウェルギリウスは神の助けがあったからこそ成功したのだと言います。わがイギリスの読者はその話に関しては、ドライデン氏の翻訳によって知ることが可能です。

激しく叫び立て、大槍に身をもたれて立つアエネーアスのまわりには  
大勢の若者らと嘆き悲しむイウルスが駆け寄って涙を流すが、  
アエネーアスは微動だにしない。老医師は衣をたくし上げ、  
パエオンのような身支度で次から次と医術の腕とポエプスの効力のある  
薬草を試してみるが役に立たない。右手で矢の穂先を探り、  
鍬やじりを銚はさみでつかんで引き出そうとしても効果がない。方策を指示する  
幸運の女神は現われず、導き主たるアポロも何一つ助けてくれない<sup>10)</sup>。

ここにウェヌスは息子が負った苦痛に憤然とした。母なる女神は  
ディクテ草をクレータのイーダ山から摘み取る。これは茎に  
みずみずしい葉をつけ、緋紫の花弁を垂らしている。野生の山羊が  
よく知っている草で、空飛ぶ矢が背中に刺さったとき用いる。  
これをウェヌスは、薄暗い雲に姿を隠しながら、届けた。  
これを輝くたらい盥たらいに注いだ川水に浸して密かに薬効を施し、アンブロシアの  
健康をもたらす液汁と香しいパナケーアを振りまく。  
年老いたイアーピュクスはその水で洗ったが、それとは知らず、  
突如として体から痛みがすっかり、当然ながら、消え去って、  
流血も傷の奥ですっかり止まった。いまや、力も入れぬのに、  
矢が手のあとについて抜け落ちた。新たな力が甦り、以前の体調に戻った。  
「さあ急げ。勇士に武器をもて。何を立っている」とイアーピュクスが  
大声で叫び、最初に敵へ向かう闘志に火をつける。「人の手になる  
助けではない。医術の力ではない、このことを成就させたのは。  
アエネーアスよ、わが右手があなたを救ったのではない。もっと  
大きな神の力があなたをより大きな仕事へと戻したのだ」<sup>11)</sup>。

第573号 1714年7月28日（水曜日）

【レディ・メアリー・ウォートレイ・モンタギュー】

9) ロバート・ノリスは転居の広告を出した。

10) 『アイネーイス』第12歌398-406行。

11) 『アイネーイス』第12歌411-29行。

非難されると、彼らのはかみ返す。(ユヴェナリス)<sup>1)</sup>

「寡婦クラブ」<sup>2)</sup>について書きましたら、手紙が数通寄せられました。その中でも会長夫人の手紙は長文ですが、つぎの通りです。

明敏なるお方へ

私たち寡婦と同席なさいますと、想像通り愉快になられます。貴方は私たち未亡人が親愛なる夫を亡くして間もなくして愛人を受け入れること、ならびに、私たちが喜んで受け入れる愛人の数に風刺の根拠を置いていられるようです。でも、貴方は私たちが埋葬する夫がどんな人物であったか、さらには、夫の死によって生じる悲しみがいかに素っ気ないものであるかについては注目なさってはおられません。貴方は私のことを会長とお呼びですが、私のことを言いますと、私は、後见人である叔父と（その後分かったことですが）3分の1の資産のために、14歳で最初の夫と結婚しました。この夫は私のことを好きなように躰けることが出来るほんの子供と見なしました。私の目の前で部屋係のお手伝いさんにキスしても、それに対して私が何の痛みも感じない無知な存在だと思われたのでした。彼が朝5時に正体がないほど酔っ払って帰宅したときでも、それは世間の殿方たちの習わしだったのです。可哀想なことに、私には管理が出来ないということで、お金を目にすることはありませんでした。（彼が言うには）彼は女中頭として召使たちを統括させるために、威厳のある従妹を連れて来ました。私には一家をまとめて行くことが出来ないという理由からでした。ひとえに私のためということで、この女中頭がお金をすべて管理しますが、私はあら捜しをしてまでして、近親者の気安さと親切心を忌避するようなことはしませんでした。私はとても臆病でしたので、言い張ることは出来ませんでした。押し付けられているばかりの無知な子供ではありませんでした。彼の侮蔑に対しては、当然のことですが憤慨しました。そして、たいていの言いなりになり判断力をなくした気の毒な細君たちと同様に、土地と多額の寡婦資産を残してくれる暴君を連れ去ってくれることを喜んだのです。若さとお金のお陰で、沢山の愛人が出来ました。中には、夫が終の病に臥せっているときに、私の歓心を得ようとした人も一人ならずいました。エドワード・ウェイトフォート閣下が最初に言い寄って来ました。彼は私の親友であり、私の価値を知っていた彼の従弟から勧められたのでした。ウェイトフォート閣下はとても感じのよい方で、明確に尊敬と愛情が注がれていなくても、誰もが彼を自分のように気に入るに違いありません。彼は4、5か月以内に私と結婚することを確信し、自信に満ちた気安い態度を取り始めました。追い払われることはないといったその態度によって、私の自尊心が傷つけられました。その逆に、私は敵意をなくして彼の最初の告白を率直な驚きをもって聞き、品よく顔を赤らめたのです。そのことが彼の心を捉えていることに気づきました。彼は私をこの世

1) ユヴェナリス『諷刺』2.35

2) 第561号参照。

で一番気立てのよい無邪気な可愛い女性と思ったのです。そういった女性だと思ってしまうと、殿方は思っている以上に愛情を降り注ぐものです。私は資産のことを考えると、こうして彼に仕返しが出来たことに狂喜しました。そして、私の力で彼の心を痛めたのだと分かると、私の勝利を完全なものにすることにし、ほかの求婚者たちを歓待しました。私は何の企みもない無邪気な人だという第一印象は、彼の頭に非常に強力に残りましたので、追従者たちは全員、私の魅力の虜になっているのであり、何度か見せた赤面とか流し目から自分がお気に入りなのだ、と彼は考えたのです。気晴らしに彼を犬のようにあしらうと、彼はそれをすべて用心深さと脅えのせいだと考えました。そして、私が60歳のサー・ニコラス・フリブルと結婚すると、友達に合わせようとする私の激しい気質を憐れむのでした。ところで、メドラー夫人のケースですが<sup>3)</sup>、あのような夫のために泣かせないで貰いたいと思います。私は結婚後1週間というもの、やもめ暮らしが恋しくてたっぷり涙を流しました。夫が亡くなったとき、亡くなって2年経っているのであり、私もその間やもめ暮らしだったのだと考えて、3週間後には夫の相続人である郷士ジョン・スターディと結婚しました。実のところ、ウェイトフォート氏との結婚を考えないこともなかったのですが、彼は我慢出来ると思いましたし、彼も喪が明けるまでは結婚をせまるのは不作法だと考えたのです。そこで、私は密かにウェイトフォート氏を4人目の夫にすることにして、さしあたり、スターディ氏を選びました。なんとスターディ氏は弱冠25歳で、身長6フィートの州で一番のがっしりした体格のキツネ狩りでした。彼は昼間ずっと犬たちについて回り、夜は夜で友人たちと犬たちに囲まれて過ごしました。そのお陰で、彼は狩りの最中に首の骨を折ることになったのだと思います。ウェイトフォート氏が新たに言い寄り始めました。今度こそ彼と結婚していたものと思いますが、私の知り合いを2、3人誘惑したことのあつる近衛連隊の若い将校がいたのです。私は彼の求愛を少々鼻にかけたくなったのです。ウェイトフォート氏がそれを聞きつけ、私に向かって女性の振舞いについて横柄な説教をするのでした。彼に対する単なる腹いせから、その日のうちに将校と結婚しました。結婚して30分後に、エドワード・ウェイトフォート閣下から悔悛の手紙が届きました。激情はひとえに愛情の激しさから生じたものであり、許して欲しいとの手紙でした。その手紙を読んで勝ち誇った気持ちになり、得意になって新たな配偶者にその手紙を見せざるを得ませんでした。そして、二人してその手紙を出しに愉快に過ごしました。悲しいことに、私の歓喜は長続きしませんでした。若き夫は結婚したとき多額の借金がありました。結婚後彼が最初にしたことは、前後に立派な飾りを付けた金箔の軽馬車をあつらえることでした。私の結婚はあまりにも性急であり、資産を将来のために取っておく慎重さに欠けていました。宮内官<sup>4)</sup>たちのところで現金は2晩で無くなりました。盗まれたダイヤのネックレスがどういうわけか、ジェニー・ウィードルの首にかかっているのを通りで見掛けたのです。食器類は少しずつ消えて行き、もし私の将校が、死の前に彼自身の依頼で体に剣を突き刺し、

3) 60歳の老人と結婚したメドラー夫人は第561号に登場。

4) 宮内大臣から任命された宮内官が賭け事の管理をした。

彼と私を満足させたのですが、500ポンド詐取した人物との決闘で気持ちよく死亡していなかったら、完全にピューターだけになっていたに違いありません。ウェイトフォート氏はまだ私を愛しており、再び言い寄って来ました。ひどい扱いの不安に先手を打つために、彼は何でも私の好きなようにしたらいいと言いました。知人たちは彼の変わらぬ愛情を受け入れたらいいと言いはじめました。私の魅力に陰りが見え始めていました。若い遊び人を相手にする喜びを抑えることは出来ませんでした。私にはまだ良識のある人を苦しめる力がありました。彼に何らかの希望があったこと、そして私がそのことを誉れに思ったこと、さらに、私がいかに妬まれる存在であったことで、私はフライデイ卿の3番目の妻になりました。彼の階級と私の資産から、私は誇りに満ちて楽しく暮らすつもりでした。しかし、私は間違っていたのです。彼は贅沢でもなく、気難しくもなく、放蕩でもありませんでした。しかしながら、ほかの誰よりも彼には苦しみました。彼は癩癩持ちだったのです。一日中、彼の架空の病気に耳を傾けなくてはならなかったのです。彼の気に入るようなことを口にするには不可能でした。太陽が照っているときに気に入ったことでも、雨が降ると不機嫌になってしまうのです。彼は体にはこれといった異状はなかったのですが、絶えず脅えながら暮らしたのです。心根の優しい私は、彼をグルーエル医師のところへ連れて行きました。病気の名前が分かったので、その日から、彼は落ち着きました。この有能な医師は彼の苦痛の原因を説明し、彼を苦しめる妄想の処方薬を与えました。暑いときには砂糖水を飲み、血液が熱を持たないようにしました。空がどんよりと曇ってきますと、彼は大概肺病を懸念しました。私のこういった惨めな生活を縮めるために、彼は治療に努めて健康を損ないました。数種類の薬を服用し、大掛かりな治療をすることになりました。これによって私たちは不安がすっかりなくなりました。彼の死後、私はもうウェイトフォート氏のことを耳にすることは無いと思っていました。彼が友人たちに私のことは諦めたと宣言していたのを知っていたのです。彼は、私の選択についてとても機知に富んだことを言っていたのです。彼は無関心を装っていたのです。彼がかなりな資産家の美人と婚約していると聞いたので、私は彼のことを考えるのを止めました。このことで少々苛立ちましたが、主人がラッセルと共に田舎に出掛けた日に、会いにやって来た従姉のウィッシュウエルの助言を無視させるほどではありませんでした。彼女は不実な恋人と亡くなった夫を忘れるには新しい恋人を持つのが一番であり、試しにそうしてみたらと言いました。そして同時に、彼女の親族のある人物を推薦しました。貴女は世の中のことは十分お分かりでしょうから、一番大切なことはお金だということがお分かりでしょうね、と彼女は言いました。この人は大変なお金持ちで、私が思うに、長生きできっこありません。だって、彼は咳の出る病気に罹っており、まもなく亡くなるに違いありませんもの。あとから、彼女が私のことでまったく同じことを彼に言っていたことが分かりました。しかしながら、私は彼女の言うことに得心が行了きましたので、早くしないと彼が死んでしまうのではないかと危惧して、急いで結婚しました。彼の方も同じ不安を抱き、ことを急いでいました。そこでさらに2週間秘密にして置くことにして、2週間で結婚しました。この2週間の間に、ウェイトフォート氏が訪ねて来て、今か今かと待ち続けていたのだが、卿の亡くなった初日に

来ては礼に失すると思った次第なのです、と言いました。私がまた自由に選択できるようになったと聞くとすぐに、自分の資産にとって有利な婚約を土壇場で解消しており、私への愛情は以前の40倍にもなっているとのことでした。この告白を聞いて、私はこれまでにない喜びを感じましたが、深刻な表情をして、貴方のご婚約の知らせをお聞きして動揺したのです。そして思わず嫉妬に駆られて、貴方への希望が無くなっていかなかったら考えもしなかったような人と結婚したのです、と言いました。善良なウェイトフォート氏はこれを聞いて平身低頭せんばかりになりましたが、責任はすべて自分にあります、この致命的な申し入れを受け入れるようにと助言した友人たちが憎らしいのだ、と心の中を率直に打ち明けました。彼は私の不運を自分の不運のようにとらえているようでした。というのは、彼は私がまだ熱烈に愛していることに一切疑いを差し挟まなかったからです。実は、新しい夫と結婚したことで、私はウェイトフォート氏のことを考えて思い止まらなかったことを後悔することになったのです。彼が私と結婚したのは私のお金が目当てでした。彼が気も狂わんばかりにお金が好きだということが直ぐに分かりました。お金を手に入れるためなら何でもしますし、お金を守るためならどんなことにも耐えたのです。ごくわずかな出費でもあろうなら、一晚中寝ませんし、支払いをするときには、まるで手足を失ったことに耐えるかのように、さんざん溜息をつきますし、それも可能な限り先延ばしにするのです。私のすることはどんなことでも、浪費だという非難だけが返って来ます。寡婦資産を貰い損ねることでもなければ、彼は私を餓死させていたのは間違いありません。彼は、私が大変な健啖家であるのを知った歎きと絶食させると私の健康が損なわれのではないかといったどっちつかずの苦悩に苛まれたのです。私が彼を悲嘆に暮れさせなかったら、彼が私にそうしたのは間違いありません。これは自己防衛の法則から許されたのです。これはとても簡単なことでした。私は出来るだけ多くのお金を使うことにしました。そして、彼がその手際に気づく前に2千ポンドのダイヤのネックレスを見せつけたのです。すると、彼は何も言わずに自分の部屋に入って行きました。どうやら、アヘンを一服して気を落ち着かせたようでした。この時、私はとてもうまく立ち回りましたので、その日に彼は卒中で亡くなったものと思います。このたびは、ウェイトフォート氏は迅速に行動に出ました。2日で彼から反応があったのです。これを書いています今、喪服を脱ぐ時期が近づいています。彼と結婚するかどうかははっきりしません。私は7人目の夫については考えていません。なぜなら、貴方が風刺していらっしゃるのです<sup>5)</sup>。でも、結局はそうはしないかも知れませんが、これだけ変わらぬ愛を捧げてきた彼の忠誠心には道義上報いがあるが当然だという気持ちがあります。どんなに常軌を逸した悪意であっても、私が故人のことをいつまでも記憶に留めておくべきだった、つまり、横柄で、取るに足らず、ずぼらで、放蕩で、癩癩持ちで、あるいは、貪欲な夫のことを嘆き悲しむべきだったと言い張ることは出来ないと思います。最初の夫は私を侮辱しましたし、二度目の夫は何もしてくれませんでしたし、三度目の夫には愛想がつきましたし、四度目の夫には滅茶苦茶にされるところで

---

5) 第561号参照。

したし、五度目の夫には苦しめられましたし、六度目の夫には餓死させられるところだったのです。貴方が名前を挙げられているご婦人方がこのように夫のことを詳しくお話しされたら、彼女たちにも、私と同様に、時間を嘆き悲しむために割く理由がほとんどないことがお分かりになります。

第574号 1714年7月30日(金曜日)

【アディソン】

彼は神々が大きな蓄えを授けている祝福された人たちとみなされていない。だが、十分所有している彼は、神の贈り物を賢明に活用して、神々の与える運命の不機嫌や最悪の苦難に我慢強く耐えることができる。(ホラティウス)<sup>1)</sup>

私はかつて大いなる秘密についてバラ十字団員と話をしたことがあります。この種の人たちは、(見せかけだけの詐欺師ではない人たちのことですが)、狂信と哲学に溢れていますので、この熱心な達人が真偽の疑わしい発見について長広舌をふるっているのを聞くのはとても愉快なことでした。彼はエメラルドの内部に宿る霊について語るのです。そして、あらゆるものを完全なものへと変えたのです。これは太陽に輝きを、ダイヤモンドに水を与えるのだ、と彼は言います。あらゆる金属に光をあて、鉛を金の特性で飾り立てます。煙を炎に、炎を光に、そして光を栄光へと高めます。彼はさらに、ほんのわずかな輝きがあれば、人々の味わう苦痛や心配や気鬱が追い払われるのだと付け加えました。要するに、この存在は当然のことながらあらゆる場所にある種の天国に変えてしまうのだ、と彼は言います。彼がこの難解な御託をしばらく続けた後、彼が自然や精神的な考えをないまぜにして同じ話の中に取り込んでいるのだということ、そしてまた、彼の偉大な秘密は自己満足にほかならないのだと思いました。

この力は、実際のところ、通常ある程度錬金術師が言う賢者の石の効果をもたらします。もしこれが富に結びつかないとしても、富への欲望を追い払うことによって、同じ効果をもたらします。かりに、これが心、体、あるいは運命の不安を取り除けないにしても、これがあると安心します。確かに、これはすべての関係者への思いやりを授けてくれます。現世での役割を与えてくれている人に対する不満や愚痴や忘恩を消してくれます。自分が置かれている共同体に関して、法外な野心とか腐敗といったこともすべて滅ぼしてくれます。会話は柔和になり、思考は穏やかになります。

この力を獲得するために用いる方法はいろいろありますが、つぎの二つの方法を述べるに留めたいと思います。一つは、自分は常に望む以上のものを所有しているのだと考えるべきだということです。二つ目は、自分は実際よりも不幸なのだと思えるべきだということです。

1) ホラティウス『頌詩』4.9.45-49

一点目に関しては、農園を失ったことで悔みを言われた人物に対して、アリストテッポスが言った返答に、私はとても満足しています。「何をおっしゃるのです、あなたには一つしかないが、私にはまだ農園が三つもあります。私こそあなたに同情して悲しむべきです」と彼は言ったのです<sup>2)</sup>。それに比べて、愚かな人たちは所有しているものよりも失ったものを考える傾向があります。また、自分よりも困った人たちのことではなく、自分より豊かな人たちのことに目を向ける傾向があります。人生の現実的な喜びや利点のすべてが狭い領域内に留まっているのです。しかし、人間というものは常に前進しているのであって、富と名声を得た人になって、懸命に努力しているのです。このため、厳密にお金持ちと呼べる人はいません。望む以上のものを持っている人はいないのです。洗練された国でお金持ちと呼べるのは、願望を自らの財産の範囲内に留め、享受する方法が分かっている以上の富を所有している中流の人々に限られます。より上流の人々は光輝ある貧困といった暮らしをし、絶えず欠乏状態になっています。なぜなら、彼らは人生の堅実な喜びを黙認しないで、実体の伴わない体面を保ちながらお互いに競争に勝とうとしているからです。良識のある人々は頭越しに行われているこの愚かなゲームをいつもとても愉快に見つめています。そして、欲望を狭めることによって、ほかの人たちが求めている密かな満足感を得るのです。実は、架空の喜びを追求するこの愚かな行為の正体を十分に暴くことは出来ません。なぜなら、これは一般に人々を零落させる大きな悪の根源だからです。財産の範囲内の暮らしをしないと貧しくなりますし、当然のこととして、代価を払ってくれる人に身売りをすることになります。申し分のない財産を残してくれた兄弟が亡くなった後、ピタコスがリュディアの王から多額のお金を提供されたとき、王の親切に感謝しましたが、すでに自分が望んでいた額の2倍もあります、と答えたのです<sup>3)</sup>。要するに、満足は富と、贅沢は貧困と等価なのです。つまり、この考えをもっとふさわしい言い方をすると、「満足は生来の富なのだ」とセネカは語っているのです<sup>4)</sup>。私はこれに、「贅沢は人工の貧困なのだ」と付け加えたいと思います。それゆえ、常に過剰で架空の楽しみを追い求めており、欲望を狭めようとしない人たちに、哲学者ビオンの素晴らしい一言をお勧めしたいと思います。「最高の幸福を追求している人ほど気苦労は大きいのです」<sup>5)</sup>がそれです。

二点目は、自分は実際よりも不幸なのだと思えるべきだということです。一点目は安楽に暮らす資力を十分に提供されている人たちのことでしたが、これは実際に困難とか不幸に見舞われている人たちのことに関わります。不幸な人が自分を他人と比較することで、つまり、自分がこうむっている不幸と降りかかったかも知れないもっと大きな不幸を比較することでその不幸が大きく軽減されるわけです。

私は誠実なオランダ人の話が好きです。この人はメインマストから落下にして足を骨折したとき、周りにいた人たちに「首でなくてよかった」と言ったのです<sup>6)</sup>。引用が身に付

2) プタルコス「心の平静について」『モラリア』469C

3) プタルコス「兄弟愛について」『モラリア』484C

4) プラトン『弁明』30B

5) ディオゲネス・ラエルティオス『著名哲学者の生涯と教説』4.48

いていますので、ここで古の哲学者の言説を取り上げるのをお許してください。この人が客人を招いて食事をしていたとき、突然妻が入って来て怒りにまかせてテーブルをひっくり返したのです。その時、彼はこう言ったのです、「われわれは誰でも、なにがしかの災難を抱えているものだ。私の今の災難だけですむなら、その者はこの上なく幸福な人間だ」<sup>7)</sup>。フェル主教が著したハモンド博士の伝記にも同じような例があります。痛風に罹り、気分がすぐれなかったとき、彼はいつも結石でなかったことを感謝したのです。そして、結石ができたときは、痛風と結石が同時でなかったことを感謝したのです<sup>8)</sup>。

本日の随想を終えるにあたって、人々の心に以上述べて来ました力を効果的にもたすことが出来るのはキリスト教の精神しかないのだと言わざるを得ません。現状に満足させるために、古代の多くの哲学者たちは、不満は事態に何一つ変化をもたすことは出来ず、自らを傷つけるだけだと言っています。私たちに降りかかる不幸はどんなものであれ、神々自身が従わなくてはならない宿命的な必然によってもたらされているのだと言う哲学者もいます。一方、不幸な人に対して、宇宙の調和を維持するために不幸も必要なのだ、そしてまた、そうでないと神の摂理が道を踏み外すのだと大層真面目に語る哲学者もいます<sup>9)</sup>。こういった考えは人を満足させるというよりはむしろ沈黙させます。彼らは、不満は無分別なのだということを明らかにするかも知れませんが、それだけでは不満を取り除くには至りません。彼らは慰めを与えるというよりはむしろ絶望させます。要するに、慰める人に向かって、アウグストゥスのような返事をするに違いありません。歎き悲しんでも生き返らないのだから、愛する人の死を悲しまないようにとの助言をした友人に「まさにそれゆえに、私は悲嘆に暮れているのだ」と皇帝は答えたのです<sup>10)</sup>。

これに比べて、信仰心は人間性にもっと愛情のこもった思いやりをもたらしめます。信仰心はあらゆる不幸な人に状況に打ち勝つ方法を指示します。それどころか、背負っている苦しみに耐えると、最終的には苦しみは自然になくなるのだということを教えてくれます。信仰によって来世には幸福になれるので、現世でも心安らかになります。

全体として、満ち足りた心は現世で享受できる最大の祝福です。もし現世において幸福が願望を抑制することから生じるのであれば、来世では幸福は願望を満足させることから生じるのでしよう<sup>11)</sup>。

第575号 1714年8月2日(月曜日)

【アディソン】

6) トム・ブラウン「ムッシュー〇〇への手紙」。

7) プルタルコス「心の平静について」『モラリア』471B

8) ジョン・フェル『高名なヘンリー・ハモンド博士の生涯』(1661) 参照。

9) セネカ『対話集』11.1.4

10) これはアウグストゥスではなくソロン。ディオゲネス・ラエルティオス『著名哲学者の生涯と教説』1.63参照。

11) 第634号参照。

死が訪れる余地はない。(ウエルギリウス)<sup>1)</sup>

老齡の隠者が素足で通りかかるのを見た無知な若者が、「おじさん、来世がなければ、惨めですね」と言います。「そうだね、でも来世があれば君はどうなのかな」と隠者は言いました<sup>2)</sup>。人間は二つの異なった状態、つまりどちらかと言えば、二つの異なった生き方をするように作られている生き物です。最初の人生は短くはかないですが、第二の人生は永続的で不変です。誰もが関心を示す問いは、幸福になるためには、これら二つに人生のどちらに主たる関心を寄せたいかということになります。言い換えると、不確かで不安定な、どう見てもごくわずかしか持続しない人生の喜びや満足を求めるべきか、それとも、不変で安定しており、決して果てることのない人生の喜び獲得するために努力するべきかどうかということです。初めてこの問いを聞いたときには、誰もがどちらに取り組むべきか十分に分かっています。しかし、頭でいかに正しいか分かっている、実際には間違っただけに固執することは明らかです。私たちは現世が終わることがなく、来世はやって来ることはないかのように考えて現世のために備えます。

人間のあずかり知らぬ高位の神霊が偶々地上に降り立ち、その住民たちを見たら、神は私たちについてどんな考えを抱くことでしょうか。神は私たちが実際とは全く異なった目的のために創られている種族だと思われるに違いありません。私たちが富と名声を得るために現世に置かれているとは思われぬはずで、富や地位や肩書のためにあくせくするのが私たちの義務だとは思われぬに違いありません。それどころか、神は私たちが永遠の罰の脅えから貧困が禁じられており、墮地獄という苦痛にさらされながら喜びを追求しているのだと考えておられるのです。きっと神は私たちが実際に定められているものと正反対の義務の体系に影響されていると思われるに違いありません。そしてこういった想像によって、神は実際に私たちが宇宙で最も従順な生き物だという結論を導き出すに違いありません。私たちが義務に誠実であり、私たちが現世に送られている目的を絶えず注視しているのだと思われるわけです。

ところで、私たちが現世に70年以上は存在しないように作られている存在であること、また、この多忙な種族の大多数が70歳にさえずらないのだと知ったとき、神の驚きは非常に大きなものになります。こういった人間たちがほとんど存在の名に値しない現世のために一生懸命努力しているのだと知ると、そうです、人間たちが何も準備していない来世では永遠の存在となるのだと知ると、神は恐怖と驚異の念に駆られて途方に暮れます。こういった二つの異なった人生を納得させられている人間が、絶え間なく70年の人生のために備え、無限の歳月を経てもなお新鮮で、すぐにでもやって来る来世の備えを無視していることほど、理性にとって大きな恥辱はありません。とりわけ、偉大に、裕福に、誉れある存在に、あるいは幸福になろうとするあらゆる努力が結局は不首尾に終わることにな

1) ウェルギリウス『農耕詩』4.226

2) ウィリアム・カムデン『ブリテン関係遺物』の「トマス・モア作品集」参照。

るときはそうです。ところが、絶えず心から来世での幸福を願うと、努力が実り、希望が裏切られることはないのだと確信します。

つぎの問いはあるスコラ哲学者が持ち出したものです<sup>3)</sup>。地球全体が大きなボールつまりごく小さな砂の塊であり、砂の一粒、一粒が千年ごとに消滅するとしたらどうするか。つぎに、その後は惨めになるという条件で、この巨大な砂の塊が一粒も残らなくなるまでゆっくりと消えて行く間は幸福であるとしたらどうするか。あるいは、巨大な砂の塊がこのように千年に一粒のペースで消滅するまでは惨めであるという条件で、その後は幸福であるとしたらどうするか。あなたならこの二つのケースのどちらを選択するか。

この場合、何千年というのは実際にはその後の持続に比べるとそれほど長いものではないのですが、心象としては一種の永遠ということが明らかにされる必要があります。それはユーナイト金貨が寄せ集められるだけの総額にならないのと同様に、砂の一粒が想定上の塊にならないのと同じことです。それゆえ、理性は躊躇なくどちらを選択すべきか教えてくれます。しかしながら、先ほど暗示しましたように、理性はその場合想像力にかき乱され、その結果、人は最初つまり現世の持続期間の長さを考え、その後続く第二のつまり来世の持続期間に大きな隔たりを感じてしまいます。言ってみれば、心はそれが直ぐ近くにあり、また長続きするものと考えて、手近にある幸福に没頭することになるのです。しかし、私たちの選択がそうであれば、わずか70年、いやそれどころかわずか30年のための幸福を選ぶことは、1日あるいは1時間の幸福を選び、永遠の不幸を選ぶことになると言えます。その逆であれば、短期間の不幸と永遠の幸福を選ぶことになります。こういった間違った選択をする愚行と思慮の欠落については言い尽くせません。

私はここで(まれなことですが)美德の道を歩むことで現世において惨めになるという最悪のケースを想定しました。しかし、(普通に起こり得ることですが)現世においても美德によって、逆の悪徳の道を歩むよりも幸福になると考えますと、非常に馬鹿げた選択が出来る人たちの愚かさあるいは狂気をどうあっても十二分に褒め称えることは出来ません<sup>4)</sup>。

それゆえ、賢明な人は誰でも、現世を単に来世の幸福に導くものと考え、永遠の幸福のためにわずかな年月の幸福を犠牲にするのです。

第576号 1714年8月4日(水曜日)

【アディソン】

わしは、これらとは逆の方向に進んで行くのだ。

その急速な運きに逆らって中天に昇って行かなくてはならない。

(オウイディウス)<sup>1)</sup>

3) この段落はスウィフトが書いたものと考えられている。

4) ジョン・ロック『人間悟性論』第2巻第21章第70節参照。

1) オウイディウス『変身物語』2.72-73

非常に鋭敏な才能の持ち主で話も面白いのですが、流行に対する法外な欲望という欠点の一つだけ持っている若者のことを思い出します。このため、彼は何度も色事に走り、その結果、その都度心身に不調をきたすのでした。彼は朝2時まで寝ることはありませんでした。なぜなら、彼は変人ではなく、時々、彼の快活さを指摘する巡査に打ち倒されたからです。彼は21歳までに警棒の洗礼を6回受けました。それで持って生まれた陽気な気質は随分改善されましたので、しばしば割れた窓ガラスやその他機知と色事を示すその他の記念碑によって彼を住まいまで追跡することになりました。手短に言ってしまうと、彼は非常に愉快な道楽者だという評判を十分打ち立てた後、25歳で亡くなったのです。

実際、風変わりだと思われたくない気持ちほど過ちや面倒なことを引き起こすものはありません。そのため、風変わりということに対して正しい認識をして、どんな場合に賞賛に値するのか、どんな場合に不道德であるのかを知ることが不可欠です<sup>2)</sup>。第一に、良識のある人なら、風変わりというものは、多数に従わずに、良心と道徳と名誉の指図を固守するときには、賞賛に値するのだという私の意見に同意するでしょう。こういった場合には、行為の原則は慣習ではなく義務だということを考えるべきです。そしてまた、私たちが理性的な生き物なので、その点で社会的になるべきだということを考慮すべきです。注意を払われないということは真実がないことの表れです。行為者の数ではなく行為の本質によって、振舞いを統制すべきです。この種の風変わりは勇敢な行為と見なすことが出来ます。この場合、他の人々と違ってその人だけが空高く舞い上がることになります。自身の気持ちに反した生活をする、つまり、そうすべきだと分かっているその勇気のない弱々しく臆病な人にとって、これほど素晴らしい例はありません。

それゆえ、理性に反する行為をしたり、取るに足らないことで目立とうとしたりするときには、風変わりは邪悪なものとなります。不敬で、不道德で、あるいは恥ずべきことで風変わりな人たちに関しては、簡単に皆から見放されると思います。そこで、洋服、振る舞い、会話、そして些細な交際といったことで風変わりな人たちについて触れることにします。この場合、慣習のせいであれ従おうとする気持ちが働きます。そして、いくつかの点で多数の人々とは逸脱する理性の彩があっても、人々のことを考えて個人的な意向や意見は控えるべきです。良識がしばしば気まぐれな人物を作ることを認めなくてはなりません、良識だけでは重要な人物とは見なされず、もっと劣った理性の持ち主からすると、滑稽な人物としか見えません<sup>3)</sup>。

この分別を欠く風変わりさを発揮したイングランド北部の紳士について耳にしたことがあります。この人は、人生のあらゆる局面において、流行や前例を無視した非常に抽象的な理性と良識の概念にしたがって行動することを自分の行動基準として定めていたのです。最初、この気まぐれが発揮されたのは些細なことに対してでした。彼は食事や睡眠の時間を決めませんでした。彼が言うには、その理由は、自然の欲求に従うべきであって、食事

2) このテーマは第458号でも扱われている。

3) 気まぐれな人物 (humourist) は、第24号、第106号、第251号、第477号などしばしば登場する。

に私たちの食欲を合わすのではなく、食欲に食事を合わすべきだということでした。地方の紳士たちとの会話では、彼は絶対に真実でない限り口にしませんでした。自分は謙虚な召使ではなく、自分の幸福を願っているのだと言いました。喉が渴いていないときに王の健康を祝して乾杯するよりもむしろ不満分子と思われることを選ぶのでした。毎朝、部屋の窓から顔を出して、30分間ほど新鮮な空気を吸い込んで、肺のために出来るだけ大声を出して詩の一節を50回復唱するのです。大概、ホメロスから取りました。とりわけホメロスのギリシア語は、ほかのものよりも腹の底から声を発し朗々としたものであり、つばや痰を出し易くなるからでした。彼にはほかにも理に適った哲学的な理屈をつけた気難しい点がいろいろありました。この気まぐれは今でも昂じてきていますので、彼は鬘ではなくターバンを巻くことにしました。絶えず汗で汚れる鬘よりも清潔なリンネルの巻き布のほうが、清潔であるだけでなく衛生的なのだという至極正当な結論を下している訳です。その後、賢明にも、わが国の衣服にある沢山の紐は当然血液の循環を阻むに違いないとの考えを述べました。そこで、彼は軽騎兵たちに倣って、1枚の布でつないだ半ズボンと上衣を誂えました<sup>4)</sup>。要するに、純粋な理性の指図のしたがって、彼は同郷人や実際には他のすべての人々とは徹底的にかけ離れましたので、友人たちは彼をベドラム送りにして資産を請求していたところですが、彼が何の危害も加えないと知らされた判事は、彼に精神異常の辞令を発行し、資産は適切な後見人の手に委ねるに留めました。

この哲学者の運命を知って、私はフォントネルの『死者の対話』<sup>5)</sup>の言説を思い出しました。「野心家や貪欲な人は事実上狂人であり、暗い部屋に閉じ込められている人々と変わりません。しかし、彼らは幸運にも多くの人を味方につけます。だが一方、狂人と見放されている人の狂気はオードヴルの狂気なのだ」とフォントネルは言います。言い換えると、これはある種の特異さであって、大多数の狂気とは相容れないのです。

本日の随筆の主題は、先ごろ受け取った手紙がきっかけとなったものですが、この手紙については、今は紙幅に限りがありますので、つぎの機会に譲りたいと思います。

第577号 1714年8月6日(金曜日)

【バジェル】

あなたも同じようにわめかなければ、これは我慢できるでしょう。

(ユヴェナリス)<sup>1)</sup>

前回触れた手紙は以下の通りです。

拝啓

4) ハンガリーの軽騎兵が西ヨーロッパで初めて登場したのは1694年のこと。

5) 「カベスタンのギヨームとブランデンブルクのアルベルト・フレデリックの対話」(*Nouveaux Dialogues des Morts*, 1707) 参照。

1) ユヴェナリス『諷刺』6.614-15

貴殿が最近大半の人たちが著述や会話において自分のことを取り上げるのが慣習となっていることを非難しておられたので、お知らせするのに若干のためらいがありました<sup>2)</sup>。でも、私は一人称で語りますが、名前を添えませんが、また、私の記すことがどう見ても自分の賞賛とはならず、まったく根拠のないと思われる私への偏見を取り除くことだけを考えていますので、虚栄はあり得ないとの結論を下した次第です。私の略歴はつぎの通りです。

私はこの数年間というもののロンドンで過ごしました。約1か月前に、ほんの少しお世話をしたことがある知人が、田舎の家で夏を過ごさないかと招待してくれました。彼の招待を受け入れ、私は心から歓迎されました。田舎で過ごすときはいつも仕事の息抜きをする誠実で率直な友人は、紳士に農夫を接ぎ木して、鋤の点検などの召使のような作業までします。この作業をするにはどうしても毎日何時間か割く必要があります。私はこういった気晴らしには興味がありませんので、友人が作業をしている時にはいつも自室に引きこもるか、家の近くの日蔭となっている遊歩道に行き、何か好みの書物を読んで過ごしました。観察者殿、ご承知おきいただきたいのですが、私は読書、とりわけ詩歌を読む場合は、とても感動する一節あるいは表現に出くわすと、声に出して、それもそこで表現されている感情にふさわしいと思う調子で読むのがごく当たり前となっているのです。そしてたいていの場合、これに何らかの体の動きを付け加えるのです。少し前に、私は不都合なことに、これに感動したある英雄詩を書く人物の目に留まったのでした。しかしながら、つぎの出来事がなかったらこのことには直ぐに気が付かなかったし、おそらくそんなことをしていなかったに違いありません。ある日、私は部屋に閉じこもってミルトンの『失樂園』第2巻に没頭していました。本を手にしてあちこち歩き回りました。実を言いますと、かなりの大声を上げるのではと心配したのです。ほどなくして「忽ち、地獄の門が耳をつんざくような音とともに猛烈な勢いではねあがり、一瞬のうちに開いた」<sup>3)</sup>という詩行になったとき、忘我の境地になった私は部屋のドアを開け放ちました。すると、家族の大半が非常にうろたえてドアの外に立っているのです。私も同じよう狼狽し、皆を心配させたことを謝りました。鍵穴越しに私の瞑想をとて熱心に見ていたところ、私がドアを急に開けたために運悪く転倒した子供には特別に声を掛けました。要するに、この予期せぬ出来事がある、明らかに家族の大半、とくに女子供たちが私のことを気遣っていることに気づいたのです。そして、友人も、引き続き親切に接してくれていますが、完全に気を許しているようには見えませんでした。この出来事があるからというもの、執事が食後テーブルにボトルを置いておかないように指示しているのに気づきました。さらに、召使たちがしばしば私のことを頭のおかしい紳士、少々気が触れている紳士、狂ったロンドンのお人などなどと喋っているのを漏れ聞いたことがありました。このため、そろそろ居所を変える潮時だと考えました。手ごろな機会を捉えてそうすることにしました。そして、しばし

---

2) 第562号参照。

3) ミルトン『失樂園』第2巻879-82行。

ば訪れて来る近隣の若いご婦人によってその決意が固まりました。ある日、私が精一杯喋っているのを聞いた後で、この婦人は小馬鹿にしたような笑みを浮かべて、お休みなさいと言って帰って行ったのです。

ロンドンの住まいに着くとすぐに、貴殿のご意見を聞きたくてペンを執った次第です。これだけのことで、果たして私は狂人と言えるのでしょうか。私は人前では冷静に振る舞う証明書を提示できますし、少なくとも狂人であることを撤回するメリットがあるものと期待しています。召使たちが言うところの、少々気が触れていると思われることは甘んじて受け入れますが、隣人たちよりも狂っていると言われるのは遺憾です。何卒、貴殿の手で私を正気に戻してください。独り言を言う癖があるのを認めている人の例として貴殿を挙げる事が出来ますが、貴殿の場合は特殊で、どんな場合にも沈黙を守らない私を正当化することにはなりません。私が恋をしていることを認めた場合はどうなるのでしょうか。恋人たちはいつも独白の快適さが許されているのです。しかし、随分以前から狂人だと思われる手っ取り早い方法は狂人ではないと主張することだというのが分かっていますので、この件についてはこれ以上触れないことにします。ちょうどそれは、一般に躍起になって素面だと思われようとする人が酔っ払うのと同じことです。それゆえ、私のことは貴殿にお任せしますが、なおのこと私は正気だと思われたいものですから、私が常に貴殿の熱烈なファンだと申し上げても貴殿の面汚しにはならないと考えます。

敬具

追伸：もし私がどう見ても気が狂っているとしたら、若いご婦人はご自分のせいでそうなっているのだと考えて貰いたいと思います。

ジョン・ア・ノウクスとジョン・ア・スタイルズの嘆願書によるとつぎのようなことが分かります<sup>4)</sup>。申立て人たちはウェストミンスター・ホールで500年以上にわたって未決の訴訟理由を抱えていること。申立て人たちが単に訴訟好きであるからではなく、争いの好む人たちに煽動されて訴訟を起こしたこと。法曹学院の若い弁護士たちが絶えず私たちに驚かしていること、そして、無報酬で私たちの弁護をしているので何の危害も加えていないと彼らが考えていること。法服をまとったこれら大勢の紳士諸君には私たち依頼人は私たち二名しかいないこと。彼らがほかにすることが何もないときには、二人とも依頼していないのだが、私たちが原告と被告にすること。世間での私たちの名声や評判を無視して、彼らは中傷や避難や無罪宣告をすること。それゆえ、今後は穏やかに過ごしたいと考えた申立て人たちは、(先般貴方が親戚のブランクを好意的に受け入れたことに勇気づけられて<sup>5)</sup>、貴方のお力で、私たち申立て人の間で長らく懸案となっている論争に終止符を打ち、私たちの反目が代々持続しないようにしていただきたいと心からのお願いをします。

草々

4) 第563号参照。

5) 第563号参照。

第578号 1714年8月9日（月曜日）

【バジエル】

肉体を離れた霊魂はつぎつぎに肉体に宿を求める。  
 動物のからだから人間の身体に移ることもあれば、  
 人間の身体から動物のからだに居をかえることもある。  
 （オウイディウス）<sup>1)</sup>

学識者たちが「自己の同一性」を形成するのは何であるかを探求することには大きな理由があります。

ロック氏は、「人格」という言葉は厳密には理性と反省を有しており、それ自身をそれ自身として考えることが出来る思考する知的存在を意味するのだという前提条件を述べた後で、人格はこのことを思考から引き離すことの出来ない意識によってのみ成り立っているのだと結論付けています。もし私が昨年冬テムズ河の洪水を見たと同様に、又今私が書いているのと同様に、方舟とノアの大洪水を見たと同様に意識しているならば、今これを書いている私、昨年冬テムズ河の洪水を見た私、及び世界の大洪水を見た私は、同一の自己——その自己を何でもあなた方の好きな実体の中に置くがよいが——であるということを書き得ないのは、これを書いている私は今私が書いている間（私が物質的又は非物質的な全く同一の実体から成り立っているといまいと）も昨日の私と同一の私自身であることを書き得ないのと同様である。何となれば同一の自己であるというこの点に関しては、この現在の自己が同一の実体から成り立っているか又は他の実体から成り立っているかは問題ではない、とロック氏は語っています<sup>2)</sup>。

この哲学の一例に多少当て嵌まる物語を見つけて、私はとても満ち足りた気持ちになりました。この物語は先日読んだ『ペルシア物語』に登場します。この書物は最近フィリップス氏が実に素晴らしい翻訳をされています。ここで、読者のみなさんにその抜粋をご紹介します<sup>3)</sup>。

前置きとして述べて置きますが、この物語は東洋風ですが多少より正確な書き方となっています。

モースル王国では、高潔な王子ファドララーが父親ビンオルトックの後を継ぎました。彼はしばらく忠実な家来たちに囲まれてこの国を統治し、美しい配偶者ゼムロウドとともに幸せに過ごしていました。そんなとき、宮廷にとっても活発で機知に富んだ若い托鉢僧がやって来ました。そして彼と話をした誰もから気に入られたのでした。彼の評判が日に日

1) オウイディウス『変身物語』15.167-8

2) ジョン・ロック『人間悟性論』第2巻第27章第16節。この箇所は加藤卯一郎訳（岩波文庫）を借用。

3) 『ペルシア物語』いわゆる『千一夜物語』は、第564号に、本日フィリップス氏の翻訳が出版されたとの広告が出た。キング博士たちによる翻訳も同年に出版された。双方ともフランス語訳からの英訳。

に広まって行きました。そこで、若い王も好奇心に駆られて彼と会って話をしたくなりました。王はそうしましたが、みんなが褒め称えていると思うどころか、彼について聞いていたことはすべて真実には及ばないと確信しました。

ファドララーは直ちに人々の会話に興味をなくしました。彼は日々この闖入者のことを信じるようになり、王国の重要な地位を提供しました。若い托鉢僧は王にこの上なく控え目に感謝した後で、どんな仕事にも就かないと誓いを立てており、あらゆることから自由でありたいので勘弁していただきたいと言いました。

王はこの実に素晴らしい温和さのお手本に大いに魅了されました。そして、彼を執務に就かせることは出来ませんでした。王の重要な話し相手かつ一番の寵臣としました。

ある日二人して狩りをしており、偶々ほかの人たちから離れたとき、この托鉢僧は彼の行なって来た旅と冒険の話をしてファドララーを慰めました。インド諸国で目にした珍しい出来事をいくつか語った後で、「この地で、自然の奥深くに潜んでいる力に精通している年老いたバラモンと知り合いになったのです。彼は私の腕の中で亡くなり、今際の際に、私が誰にも言わないという条件で、最も重要な彼の秘密を伝えたのです」と彼は語ります。王はすぐさま以前彼が高貴な地位につけてやろうとしたのを断ったことを思い出しながら、それは金を作る力だと言いました。「陛下、そうではありません。それよりももっと素晴らしいことです。自分の靈魂を注ぎ込んで死者を生き返らせる力なのです」と托鉢僧は言います。

彼がまだ喋っているとき、一頭の雌鹿が二人の傍に走り寄って来ました。すると、弓を用意していた王は、托鉢僧に君の技を見せる絶好のチャンスだと言って、その雌鹿の心臓を射ぬきました。直ちに若者は死に絶えました。その瞬間に、雌鹿は生き返り、王に近づき、甘えました。そして、何回かいたずらをして、再び草の上で死亡しました。鹿が亡くなると同時に、托鉢僧が生き返ったのでした。王はこの非常に珍しい効力にいたく満足しました。そして、托鉢僧にすべてを教えて欲しいと懇願しました。托鉢僧には最初死にかかったバラモンとの約束に背くことに若干の良心のとがめがありました。最後にはこんなに優れた王様には何も隠すことが出来ないと言いました。そこで、王に秘密を守るとの誓いをさせた後で、すべての秘密はそれを口にするある二つの神秘的な言葉を繰り返すことだと教えました。これを試してみたくなくなった王は、直ちに教えられた二語を繰り返し口にしました。すると自分自身がたちまち雌鹿の体の中に入っているのです。王には新しい生き物の中にある自分のことをじっくり考える時間はほとんどありませんでした。なぜなら、もし彼の意図に気づいた王が素早く森に逃げ込んでいなかったとしたら、自分の靈魂を王の遺体に注ぎ込み、王の弓を自分に向けたこの約束に背いた托鉢僧はその場で死亡していたのですから。

今では自分の非道さを勝ち誇った托鉢僧は、モースルに引き返し、不幸なファドララーの玉座とベッドを埋めたのです。

新しく獲得した王国での自分の地位を揺るぎ無いものにするために、彼が最初にやったことは家来たちに領土内の鹿を絶滅させるように命じた布告を出すことでした。もし王が

木の足元で死んでいた夜鳴き鶯を生き返らせることで追跡者たちの手をかわしていなかったら、王も他の鹿たちと一緒に死んでいたに違いありません。王はこの新しい姿で宮殿まで無事に飛んで行きました。そして、女王の部屋の近くにある木にとまって、女王を窓辺に近づけようと辺り一帯を旋律が美しくかつ物悲しい調べで満たしました。王は憐れまれる代わりに、女王とお付の女奴隷を陽気にさせるのは自分だけだと知って悔しくて仕方ありませんでした。しかしながら、彼は毎朝女王にセレナードを歌い続けました。するとやっとな彼の旋律に魅了された女王が鳥を捕まえる人たちを呼び寄せ、何が何でもあの鳥を捕まえて自分のところに持って来るようにと命じました。今一度最愛の配偶者のそばにいられる機会が訪れたことを喜んだ王は、簡単に捕まりました。王は彼女の元に持って来られたとき、他の婦人たちに触られるのを恐れましたが、王は自分から進んで飛んで行き、彼女の胸元に身を寄せました。ゼムロウドは新しくできたお気に入りかと思いがけず好意を寄せてくれたことをとても喜び、自分の部屋の無蓋の籠に入れさせました。彼はその鳥籠で毎朝、自分に可能なあらゆる所作を交えて彼女の機嫌取りをしました。女王は一日中彼のさえずりを聞きながら彼と共に日々を送りました。もし托鉢僧が頻繁に部屋にやって来て、彼の目の前で彼女を愛撫するのを目にするという筆舌に尽くし難い苦痛を味わっていなかったら、そんな状態であっても彼は幸せを感じる事が出来たことなのでしょう。

この篡奪者は、女王を弄びながらしばしば夜鳴き鶯のご機嫌取りをしようとするのでした。他方、かっとなったファドララーは嘴で彼を突き、羽をばたばたさせ、無力な怒りがありとあらゆる形で示したのです。彼には敵愾心を女王には新たな気晴らしを提供することになりました。

ゼムロウドはまた、小形のペット犬が気に入っていました。その犬を部屋で飼っていましたが、ある晩、偶々死亡したのです。

王は直ちに夜鳴き鶯の姿を離れ、この新しい体を活気づけようと考えました。彼はそうしました。翌朝、女王はお気に入りの鳥が籠の中で死んでいるのを目撃しました。このときの彼女の悲しみは口では言い表せません。そこには分別に似た何かがあるように見えたのですが、小鳥のあらゆる所作を思い出すたびに、彼女は悲嘆に暮れたのです。

お付の女たちは慰めるために来てくれるようにと托鉢僧を呼びにやりました。彼はこの出来事に悲しんでいるとの気持ちを伝えましたが無駄でした。そして彼女が繰り返す泣き言にやっとな心を動かされました。「分かりました、技の限りを尽くして貴女を喜ばせてあげます。再び夜鳴き鶯を毎朝生き返らせて、以前のようにセレナードを奏でさせてあげます」と彼は言います。女王は信じられないといった表情をして彼を見詰めました。すると、彼はソファーに横たわり、夜鳴き鶯の体に自分の靈魂を注ぎ込んだのです。ゼムロウドが驚いたことに、夜鳴き鶯が生き返ったのでした。

部屋の片隅で小形のペット犬の姿でこの次第を見ていた王は、直ちに元の体を取り戻し、この上なく憤慨して鳥籠のところまで駆けつけて、偽の夜鳴き鶯の首をねじ切ったのです。

ゼムロウドがこの二番目の出来事に驚き、氣遣う様子は大変なことでした。でも、王は

彼女に聞いてくれるようにと懇願した後で、はらはらする珍しい経験の全容を語ったのでした。

森の中で発見された托鉢僧の遺体と鹿を全滅させろという彼の布告を知って、彼女はことの真相に疑いを持つことはありませんでした。極度の繊細さから（東洋の婦人特有なのですが）彼女はしばらくの間托鉢僧と過ごした罪のない不貞行為に非常に苦しんだのだ、そして、ファドララー自身の説得でも彼女の気持ちを鎮めることは出来なかったのだ、とこの物語は付け加えています。彼女はその後間もなくして、この上なく厳格な裁きでも罪と言えないことに対して、今際の際で許しを請いながら深い悲しみに包まれて亡くなりました。

王は彼女の死をととても苦しみ、王国を近親者の一人に譲り、余生を隠遁して孤独に過ごしました。

第579号 1714年8月11日（水曜日）

【アディソン】

嗅覚鋭い猟犬たち。(ウェルギリウス)<sup>1)</sup>

チャールズ1世の治世、印刷出版業組合が特許状によって聖書の印刷が委託されていたのですが、ある版でとても大きな誤植つまり誤りを犯しました。「あなたは姦淫してはならない」とすべきところを「あなたは姦淫するのです」となったものを数千部印刷したのです。ロード大主教は、この怠慢を処罰するために、組合に対して星室庁裁判所でかなりの額の罰金を課しました<sup>2)</sup>。

この退廃した時代に流布している世の中の慣行によって、男女を問わず非常に多くの若い放蕩者たちがこの偽の聖書を所有して、間違った解釈にしたがってこの戒めを順守するのではないかと私は危惧しています。

教会の初期のころには、姦通者は永遠に破門され、涙ながらに心からの悔悛の情を見せて懇願したにも関わらず、一生教会の集まりには参加できませんでした。

ここで、この罪を死でもって処罰した異教徒たちの古代の法と現在新教を取り入れている国々に施行されている同種の法について触れることにします<sup>3)</sup>。しかし、この種のテーマは、何か気晴らしとなることあるいは珍しいことで元気づけられない場合には、私の新聞を無視してしまう平凡な読者にとってはあまりにも深刻なものですから、ここでは最近入手した古代のものとしてされている草稿の内容を公表することにしたいと思います。もっともこの草稿にある現代的な言い回しや幾つかの点から、この草稿は本物というよりもむしろ

1) ウェルギリウス『アイネーイス』4.132

2) いわゆる「不道徳聖書」は、1631年、ロバート・バーカーと譲受人ジョン・ビルが出版した。モーセの第七戒の not を落としたため、300ポンドの罰金が課せられ、すべて回収された。

3) アテネの法律では、当該の女性の父、夫、さらには兄弟が相手の男性を殺害しても罰せられなかった。

る現代の詭弁家の作だと思われませんが。

エトナ山にウルカヌスを祀った神殿があり、(史家たちが言うには)そこに近づいて来る人が苦しんでいるのかどうかを嗅ぎ分けることが出来る嗅覚の鋭い犬たちに守られていたことは、学識者たちがよく知っていることです。犬たちは苦しんでいる人に出会うとじゃれ付き、主人ウルカヌスの友人として優しく接しましたが、墮落した人がやって来ると飛びかかり、神殿から追い出すまでは吠え続けたのです<sup>4)</sup>。

私の手元にある草稿ではこの犬たちについてつぎのような説明があります。おそらく、この話の解説として考えられたものと思われまます。

この犬たちは、狩猟と貞節の女神である妹のディアナから兄ウルカヌスに捧げられたのです。彼女がこの生来の本能と聡明さを備えていると認めた猟犬たちの中からこの犬たちを育てたのでした。ウェヌスへの意趣返しからそうしたのだと考えられました。ウェヌスは帰宅したとき、夫の機嫌の良し悪しをいつも犬たちの出迎えの仕方ですら判断したのです。犬たちは神殿で数年間過ごしましたが、すぐに咬みつくので信者の多くが脅えました。シチリアの女性たちは神官に厳粛な代表を送り、もしマスチフ犬たちに口輪を付けてもらえなければ、毎年の贈り物を持って神殿にお参りしませんと知らせました。そこでやっと今後は7歳以下の娘たちのコロスが贈り物を持参するというので、神官とこの一件について折り合いが付きしました。犬たちの幼い娘たちへの接し方が母親たちへのそれと大きく異なっていたのを見るのは驚くべきことでした、と著者は語ります。若い婦人と結婚し、生来嫉妬深かったシラクサの王はこの神殿の神官たちのつてで、この名高い血統の小犬を一頭手に入れたということです。最初は、女王にとってこの子犬はとても煩わしい存在であり、追い払って欲しいと夫に頼むほどでした。でも、善良な夫は「私を愛する者は私の犬をも愛する」<sup>5)</sup>というシラクサの古の諺を引いて、彼女を黙らせたのでした。その後、彼女は夫と犬と一緒にとても穏やかに過ごしました。シラクサのご婦人方はこの子犬のことで困惑し、評判の良い婦人の中には犬がいなくなるまで宮廷に行くのを拒んだひとたちがいました。実際、犬の聡明さをものともしない人たちもいましたが、犬が彼女たちに本当に咬みつきはしなかったものの、激しく吠えかかるのでした。神殿の犬たちの話に戻りますと、神殿に住んで数年間大きな評判となりましたが、リリベウム岬<sup>6)</sup>に暮らしているある未亡人の元を訪れた神官の一人が、夜かなり遅くなって帰ったとき、犬たちが非常に激しく飛びかかっていきました。他の神官たちが助けに出て来ていなかったら、彼をくわえて振り回していたに違いないという出来事が起こりました。このため、元の本能を失ってしまったとして、犬たちはすべて縛り首になった、と著者は語っています。

4) 2世紀のローマの修辞学者クラウディウス・アエリアヌスが書いたもの。アエリアヌス『動物の性質について』参照。

5) この諺はシチリアのものではない。アパーソンは起源を12世紀としている。一般には15世紀とされており、日本でいう「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」に相当する。

6) リリベウム岬は、シチリアの西端にある岬。

本日の紙面を終わるにあたって、わが国のご婦人方を公平に、言うなれば敬意を持って評価し、異教のご婦人方と美德と信仰心というより健全な原理のもとで教育されたご婦人方との違いを明らかにしてくれるこの種の犬がグレート・ブリテンにいたらいいと言っておきます。